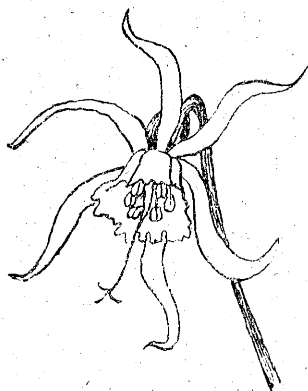
○イトザキズイセン（糸咲水仙）に就て（津山　尚）

明治41年1月5日發行の科學世界1卷4號に牧野先生は「稀有植物ノーナルいとざきずいせん」の題で，圖版1枚を伴つた新植物を紹介され，更に同年11月發行の植物學雜誌歐文欄161頁にてスイセン（水仙）の1變種として *Narcissus Tazetta* L. var. *pancratiformis* Makino の新學名と英文の記相文を發表された。それによるとこの植物は竹島の產と傳えられ，「其の葉の樣子は普通の水仙と異つていないが，其の花に到つては著しく特狀を示して居る。即ち其の名の示す如く其花蓋片即ち其萼片と花瓣とは頗る狹長にして殆んど絲狀を呈せる線形をなして居り其色は白である又花冕（Corona —— 註，副冠）は杯狀を呈して又漏斗狀の趣きがある色は黃である」又「……水仙の異狀なる一變種であつて……特に園藝上では最も喝采を博すべき一品たることを失はないと思ふ。そして今世間に之を見受けることがないのを見れば餘程乏しき品と言はねばならぬ。……」（原文片假名）ものである。英文の方では「花は徑 5 cm で花托の筒部を缺除し，雌蕊は副冠內に含まれるが，雌蕊は長く超出し，柱頭は3裂している」ことが判る。小生もこれを見たことはないが，柱頭がこの樣に長く突き出し，その先端が深く3裂している點は他のスイセン屬に全く見られない特徵であつて，花托の筒部がないことは蜜の分泌がないことを意味し，受粉上の障害が大であることが想像されるし又實際に果實を實ばない由である。このことはこの植物が緣の遠い2種のスイセン屬の間の交配種であることを思はせる。葉の狀態は牧野先生も指摘される樣にスイセン（房咲水仙）と異つていないし，花梗の長いこと，1總梗に2—4花を開くことは，少くとも片親はスイセンであることを示している樣である。しかし花徑は5 cm もあり，副冠も稍大である點は他の片親がより以上に大形の花を有し，副冠も大であることを要する樣に思ふ。スイセン屬は園藝上種々の種間雜種が作出されているが，この樣な形態のものを嘗つて聞かないのは，兩親の組合せが餘程突飛なものであつて普通は發芽可能な F_1 を生じないのであるが稀な機會にこの植物が出來したものではあるまいかと想像される。そう言う可能性のある片親として *N. cyclamineus* Baker 等が考えられないでもない。このものの花瓣は細く，花托の筒部は短く，副冠は長く，雌蕊も長く，花徑はスイセンより大である。



科學世界の圖版の一部の模寫

○タカネタウウチサウ（原　寬）

永らく使ひ慣れた *Sanguisorba sitchensis* C. A. Meyer (1856) の學名は，Fernald

博士が指摘した様に *S. stipulata* Rafin. (1833) を起用せねばならなくなつた。本種は我國で可成りの變化が見られ殊に小苞の長さ，蕚の毛等の差異が目立つ事は本誌 10: 232 — 237 (1934) に述べておいた。タカネタウウチサウでは蕚筒迄平滑で小苞は短かくこの形が最も廣く分布して居り，こたを小苞が著しく超出し蕚筒部に毛を多く有するリシリタウウチサウと比べると隨分違つて見える。併し石狩大雪山產には蕚筒の毛が少く殆ど無毛に近づきリシリダウウサウとフデタウウチサウとの中間を示すものがあり，又小苞の長さも中位のものがある。上野至佛山のものは小苞は短く蕚筒には僅かに毛がある。北米のものは凡て小苞が短く，蕚筒は全く無毛なのが普通だが，Oregon 州のものでは蕚筒に毛があり，Sitcha にも蕚筒の先端部だけに毛があるものがある。ユキクラタウウチサウはややカライトサウに似た形質を持つて居るが矢張りタカネタウウチサウと別種にはできないと思ふ。又 *S. obtusa* v r. *contraria* Koidzumi なる學名に就ては標本だけでなくその原產地に於て再調査する必要がある。

以上の様に廣く見た本種は主に北太平洋に分布して居るが，比較的古い地質の山地に點々と離れて產し，殊に北千島，カムチヤツカ，アリユーシヤン西中部には無くてここに大きな分布の間隙ができて居る。更に遠く飛んで北米東部の一小地區に知られ，可成り古い起源のものと考へられて居る。上述の如く餘りはつきりしない中間形もあるが一先づ學名を整理し今迄に知られた產地を次に列擧する。

Sanguisorba stipulata Rafinesque, Herb. Rafin. 47 (1833)-Fernald in Rhodora 48: 12 (1946).

var. **latifolia** (Hooker) Hara, comb. nov.

S. canadensis L. β. *latifolia* Hooker, Fl. Bor.-Amer. 1: 198 (1834).

S. sitc ensis C. A. Meyer in Ttautv. et Meyer, Fl. Ochot. 35 (1856) -Hara in Journ. Jap. Bot. 10: 232 (1934) -Tatew. et Kobay., Contr. Fl. Aleut. 58 (1934) -Tatew. in Journ. Soc. Agr. & For. 26 (no. 121): 33 (1934) -Hultén, Fl. Aleut. 232 (1937); Fl. Alaska & Yukon 6: 1052 (1946)-Juzepczuk in Fl. URSS. 10: 428, t. 26, f. 4 (1941)-Abrams, Ill. Fl. Pacific States 2: 445, f. 2465 (1944).

Poterium sitchense (Meyer) S. Watson, Bibl. Ind. 1: 303 (1878).

S. latifolia (Hook.) Coville in Contr. U. S. Nat. Herb. 3: 339 (1896).

S. canadensis var. *sitchensis* (Meyer) Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 31: 137 (1917).

S. sitchensis var. *typica* Hara, l. c. 233 (1934).

Dist. Hokkaido (m. Yubari !, m. Ashibetsu !), Kuriles (Urup, Shimshir), Ochotsk, Aleutian orient. !, America occident. (Alaska !, Washington !, Idaho) et America orient. (Anticosti, Labrador aust.).

var. **pilosa** (Hara) Hara, comb. nov.

S. sitchensis var. *pilosa* Hara, l. c. 233 (1934).

Diat. Hokkaido (m. Daisetsu !), Honshu (m. Iwate ! , m. Shibutsu !), et America occident. (Oregon !).

var. **bracteosa** (Hara) Hara, comb. nov.

S. sitchensis var. *bracteosa* Hara, l. c. 233 (1934).

Dist. Hokkaido (m. Shari ! , m. Daisetsu !).

var. **riishirensis** (Makino) Hara, comb. nov.

S. riishirensis Makino in Bot. Mag. Tokyo 21 : 155 (1907).

S. sitchensis var. *rishiriensis* Kudo, Rep. Veg. N. Saghal. 168 in nota (1924) -Hara, l. c. 233 (1934).

Dist. Hokkaido (m. Rishiri !), Kuriles (Etorofu !), Korea (m. Paik-tu-san !), et Sachalin (m. Tosso !).

var. **Kishinamii** (Honda) Hara. comb. nov.

S. Kishinamii Honda in Bot. Mag. Tokyo 47 : 433 (1933).

Dist. Honshu media (m. Shirouma !).

○特殊な接木法（津山　尙）

福島市と郡山市の中間の高原地帶にある二本松在の人に聞いた話である。この方面ではカヤを家まわりの風除用に植え，又その果實を間食用に多く用ひる風習がある。所がカヤの生育は頗る遲く，果實を結ぶまでには七八十年もかゝると言ふ。それ故次の樣な特殊な方法を用ひて生育と結果を促進するのが例になつてゐる。先づカヤの實を兩手に一杯つかみ，その儘一塊にして穴の中に播く。翌年5月頃，數十本密集して出揃つた若苗を植つた儘各の莖を地面上數 cm の所で兩側の皮を長さ 3 cm 許小刀で剝取り形成層を露出させる。次にこれを集めて紐で稍々固く縛つて一本とし，その上から更に竹の皮で卷き，砂を盛り上げてその部を隱し，更に粘土を被せて，苗の先端のみが見える樣にして置く。かくすることによつて雨水の浸入を防ぎ，適當な濕氣を與へて互ひに呼接される結果となる。3 年目の春元氣のよい 2，3 本を殘して，接着した部より上方を切り取ると殘つた苗は數十本分の根部を得て勢よく伸び初めるが，數年後にその最も元氣なのを一本殘して切ると成育は益々順調で 50 年目位から果實を結び初めると言ふ。

この方法は同地方でユズにも用ひる由である。この場合は果實の儘播きつけ，翌年果皮を破つて出てくる新苗に同樣の處理をするのである。この地方の俚言に「桃栗3年，柿8年，馬鹿の柚めが50年」と言ふのがあり，普通ではユズの種を播いた人は生涯の間には果實を食することが出來ぬとされてゐるが，この方法によると20年目位から結果を初めると言ふ。この地方でカヤ，ユズに限つてかゝることをするのは如何なる譯であるのか誰も知らない由。